

# 修証義

## 第一章 総序

生しょうを明あきらめ 死しを明あきらむるは仏家ぶつけ

一いち大事だいじの因縁いんねんなり、生死しょうじの中に仏ほとけあ

れば生死しょうじなし、但ただ生死しょうじ即すなわち涅槃ねはんと

心得こころえて、生死しょうじとして厭いとうべきもなく、

涅槃ねはんとして欣ねごうべきもなし、是時このときはじ初め

て生死しょうじを離はなるる分ぶんあり唯一ただいち大事だいじ

因縁いんねんと究尽ぐうじんすべし。

人身にんしん得うること難かたし、仏法ぶつぼう値おうこと希まれ

なり、今我等いまわれら宿善しゆくぜんの助たすくるに依よりて、

已すでに受け難がたき人身にんしんを受けたるのみに

非あらず、遇あい難がたき仏法ぶつぼうに値あい奉たてまれり、

しょうじ なか ぜんしょう さいしょう しょう  
生死の中の善生、最勝の生なるべし、

さいしょう ぜんしん いたず ろめい むじょう  
最勝の善身を徒らにして露命を無常

かぜ まか なか  
の風に任すること勿れ。

むじょうたの がた し ろめい  
無常憑み難し、知らず露命いかなる

みち くさ お みすて わたくし あら  
道の草にか落ちん、身已に私に非ず、

いのち こういん うつ しぼら とど がた  
命は光陰に移されて暫くも停め難し、

こうがん さ たず  
紅顔いづくへか去りにし、尋ねんとする

しょうせき つらつらん ところ おうじ ふたた  
に蹤跡なし、熟観ずる所に往事の再

お おお むじょうたちま いた  
び逢うべからざる多し、無常忽ちに到

こくおうだいじんしんじつじゅうぼくさいし  
るときは国王大臣親暱従僕妻子

ちんほう な ただひと こうせん おもむ  
珍宝たすくる無し、唯独り黄泉に趣

おの したが ゆ ただこ  
くのみなり、己れに随い行くは只是れ

ぜんあくごうとう  
善悪業等のみなり。

いまよいんがしごつぼうあき  
今の世に因果を知らず、業報を明ら

さんぜしぜんあくわき  
めず、三世を知らず、善悪を弁まえ

じゃけんともがらぐん  
ざる邪見の党侶には群すべからず、

おおよそいんがどうりれきねんわたくし  
大凡因果の道理歴然として私なし、

ぞうあくものおしゆぜんものほ  
造悪の者は墮ち修善の者は陞る、

ごうりたがもいんがぼう  
毫釐も忒わざるなり、若し因果亡じて

むなごとしよぶつしゆっせ  
虚しからんが如きは、諸仏の出世ある

そしせいらい  
べからず、祖師の西来あるべからず。

ぜんあくほうさんじひとつ  
善悪の報に三時あり、一

にはじゆんげんほうじゆふたつにはじゆんじしやうじゆみつには  
者順現報受、二者順次生受、三者

じゆんごじじゆさんじぶつそ  
順後次受、これを三時という、仏祖の

どうしゆじゆうそのさいしよこの  
道を修習するには、其最初より斯

さんじごつぼうりならあき  
三時の業報の理を効い験らむるなり、

爾しかあらざれば多く錯りて邪見おおに墮あやまつる

なり。但ただ邪見じゃけんに墮おつるのみに非あらず、

悪道あくどうに墮おちて長時ちようじの苦くを受うく。

当まさに知るべし今生こんじようの我身わがみ二つ無なし、三み

つ無なし、徒いたずらに邪見じゃけんに墮おちて虚むなしく

悪業あくごうを感得かんとくせん、惜おしからざらめや、悪あく

を造つくりながら悪あくに非あらずと思おもい、悪あくの報ほう

あるべからずと邪思じゃしゆい惟よするに依よりて、

悪あくの報ほうを感得かんとくせざるには非あらず。

年 月 日

氏名

謹写